

本を売っているのではない、考え方を売っているのだ

雑誌「丸」の編集長や主宰をしていた高城肇氏が、2年間に亘り毎月1回、話題を決めず、四方山話のように坂井三郎さんと対談したものをまとめたのが、撃墜王との対話。文庫本では、「大空のサムライ 完結篇」である。丸の主宰だから、多くの名パイロットや元軍人が書き著したものを目にしている。高城氏の思考方法や死生観、人生観など、坂井さんの影響が極めて大きい。徳は孤ならず、である。

この高城氏の著書に、「六機の護衛戦闘機」がある。

山本五十六提督が、ミッドウェー海戦での惨敗をうけて、「い」号作戦のため、最前戦の南方諸島の将兵を激励に来た時に、6機の護衛戦闘機（零戦）が選ばれた。飛行長は、全戦闘機で護衛します、というのを参謀が、「制空権はこちらにあるのだ」と、わずか6機に決定した。だから、この任務は成功するのが当然だった。（実際には、暗号を解読されていて、しかも敵は双胴のP-38が16機、雲に隠れて待機していた。・・・のちに生き残ったパイロットの話では、まったく敵が見えなかった、という。）長官機は、ブーゲンビル島に撃墜された。海軍甲事件である。・・・このときに、山本は自殺しに行った、という説が戦後流れた。（20年以上前から、「勝つ司令部と負ける司令部」などの本がでていて、要するに山本五十六凡将論である。）

海軍という組織は、下士官や兵に対しては非情なもので、暗黙のうちだが、彼ら「護衛に失敗した兵士」を冷たく処遇し、生きてラバウルから出られない方針をとった。まるで、懲罰のように、ほとんど連日のように出撃させ、・・・いかにも撃墜される！という命令である。ただし、直属の上官は、彼らの心情を思い、なんとかしてやりたいとは思っているが、上層部は非情である。・・・このあたり、パイロットも飛行機も大事だ、と言いながら、言行不一致である。まあ、理屈も何もない所だから。

高城氏は、この6人の生き立ちや考え方、心の動きを克明に追う。彼らの無念さを感じる時、坂井三郎さんは、護衛機の数や技量つまりエース級のパイロットを投入していたか、入念な護衛を考えていたか、を指摘している。

結局6人中4人は、2ヶ月以内に戦死する。この頃の米軍の戦闘機は、F6Fヘルキャットである。性能は、零戦を凌駕する。柳谷謙治飛兵長は、右手の手首から先を失ったが、唯一戦後まで生き残った。この人に、吉村昭氏がインタビューしているが、「敵機はまったく見えず、気がついたら一式陸攻が墜落していくところだった」と語った。

もう一人の杉田庄一飛兵長は、その後阿修羅のごとき活躍で、少なくとも70機は撃墜している。どうせ生きては帰れない、という思いもあっただろうが、大変な技量の持ち主である。護衛のときにも2機撃墜している。ある空戦で全身大火傷を負い、生きてラバウルから出ることができ、自宅にも帰ることができた。そして日本本土への爆撃機の迎撃に従事した。司令は源田実である。あるとき、迎撃のため鹿屋基地で源田実が、敵機が近づいていることに気づき、慌てて迎撃中止を指示したが遅すぎて、果敢に離陸したところを

F6Fに撃墜され、戦死した。人はその性（サガ）のように死ぬ。

まったく別の時の話。坂井三郎さんが怒って書いておられるのだが、開戦の前に総指揮官が搭乗員たちに「たとえ被弾しても決して自爆するな。生きてもどれ！」と命じた。飛行機よりもベテランの優秀なパイロットのほうが大事という、至極当然の話である。少なくとも4～5年以上かかって育て上げた者である。・・・ところが、この話は全く効力がなかったのである。中攻隊の一機が敵地上空で被弾し、命令どおり不時着し、原住民に保護され、やがて陸戦隊に救出された。

連合艦隊司令部、軍令部は彼らの生還を許さず、一度未帰還戦死と認定された搭乗員は、すでに原隊に復帰どころか、籍さえ奪う処置をとった。しかも恩着せがましいではないか。せめて武士の情けとして、死に場所を与えることになり、九六式陸攻一機を与え、部隊長に対しては自爆することを要求した。部隊長は、彼らをかばおうにも命令とあれば仕方がない。攻撃の時、もっとも敵戦闘機に食われやすい編隊の末端の位置に配置し（鴨中隊の鴨番機）、彼らが撃墜される日を待ったが、攻撃のたびに被弾しながらも生還した。実に幸運のペアであり、歴戦の勇士でもあった。しかし、それよりも高い技術を持っていた、というべきだろう。坂井ら戦闘機隊は、それとなく、彼らを掩護している。

司令部はしびれを切らし、ある日、自爆を決行させよ、という命令がきた。森玉部隊長も、彼らをかばいきれず、命令に背くわけにもいかず、あたら歴戦の有能な搭乗員と貴重な飛行機一機を抹殺する。何という非情で愚かな決定だろう。それを山本長官が認めたというのである。

よくぞ生還してくれたと称賛してこそ、人の上に立つ者の態度である。罪どころか、敵地攻撃で被弾不時着、大きな手柄をたてた者たちではないか。この戦士たちを日本人としても日本海軍搭乗員としても認めない。死ぬと言い、最後に殺すという判定を下すなど狂っていると云わざるを得ない。

人的物的に不足が深刻化し、長期戦が叫ばれている時期である。愚か極まる。

それにしても、連合艦隊司令部職員の中で、誰一人無実の勇士である彼らをかばう者がいなかったとは、悲しくて情けなくて、涙も出ない思いだ。この自爆行を強行に主張したF参謀長自身は、二度も捕虜を体験して生き残っている。（筆者註：このFというのは、福留繁中将のことだろう、連合艦隊参謀長である。海軍乙事件と呼ばれているが、現地人ゲリラに捕獲され、新Z号作戦計画書や司令部用信号書、暗号書などの数々の重要書類を奪われている。隠したり焼却する努力をせず、「作戦計画書は奪われていない」と強弁し、捕虜になったわけでもなかったことから、結局お咎めなしですんでいる。これこそ万死に値する。戦後、戦史編纂をしていた大井篤に向かって「君や千早が重要書類を奪われたと言っているが、迷惑な話でそんなものはなかった」と言いに行き、「盗まれたのは事実です。お帰り下さい」と言われてスゴスゴと帰った。

山本長官機の撃墜は、油断、驕りだろう。戦前、源田実の戦闘機無用論に乗った航空部長だった山本五十六にしてみれば、皮肉な結果ではある。わずか3年であっても、その間

に育成できたはずのパイロットが現れてこなかった。優秀なパイロットの育成には、数年かかるのが常識である。ラバウルで言われていたことは、初戦に生き残った者は、数ヶ月は生き延びることができる、すなわち、初陣で撃墜されるパイロットが多かったことを意味する。それほど、ベテランの搭乗員が必要だったのである。

(行間からは、坂井三郎さんらパイロットたちは、長官がどうのこうの、という特別な思いをもっていなかったことがわかる。そんなことよりも、つまり出世がどうのこうの、とか自己保身などよりも、目先の敵機を撃墜することの方がはるかに重大関心事であったことがわかる。逆に上層部は、自己保身や出世に重きを置いていたことがわかる。)

これらの文章を書いた時、坂井の友人が、「そんなことを書いたら殺されるかもしれないぞ」と翻意させようとしたが、坂井は、強引に書いてしまった。

坂井三郎さんは、21世紀を前に2000年9月に急逝されたのだが、その数週間前に高城氏を訪ねて、

「娘をアメリカに嫁し、あの国を見る機会が多くなって思うのは、若い頃、一途に国のために戦ってきたが、時に冷静に周囲を見渡して、ふと疑問を感ずることがある。全部がそうだとは言わないが、大多数の佐官級以上の指揮官は、下士官・兵を死地に投ずるだけで、自分は安全地帯に逃げ込んでいた。カミカゼ特攻の際もしかり、佐官級で出撃したのはごく少数だった。明治の頃とは大違い、口では勇ましいことを言って部下たちを叱咤鼓舞するが自分が出ない。(筆者註：特攻隊Iに書いた。)失敗しても責任をとらない。ひとのせいにする。痛みを下に押し付けて、自分だけ胸を張る。反省しない。そういう風潮は戦場でも蔓延していた。私らは若かったから、またそういう掟の下で教育されたからコロリと騙されていた。私は心中ひそかに、そんな彼らと闘っていた。負けん気ですよ。敗戦しても何も変わらず、その風潮はますます募り、とうとうこんな国にしてしまった。嘆かわしい限りです。」

高城氏が言う、編集部にレイテ戦で味方がオトリになってくれたのに敵前で反転した艦隊(筆者註：栗田健男司令長官率いる戦艦大和を中心とする艦隊。いくつも理由を考えて反転したが、明白な敵前逃亡である。栗田は終生沈黙を保ったが、一度だけ、竹馬の友に「疲れていて判断を誤った」と語ったという。当時55歳、戦争中は、将兵ともに疲れている。理由にもなっていない。……この時点で連合艦隊は事実上消滅した。)の参謀長という人(小柳直次参謀長のこと)がしばしば訪ねて来た。その風貌姿勢はまことに泰然として如何にも武人らしく恬淡として魅力的でした。しかし実際には、戦闘中は弱気な老人のような、戦うことに自信を喪失した指揮官像が浮かんでくる。命令を受けた部下はたまらない。責任感が不可欠なのに、翻って現在は国をリードする政治家も官僚も責任のなすり合いで、金と出世、自己保身に汲々としている。

ミッドウェーで惨敗した南雲忠一や源田実が罰せられた話は聞かない。まあ、信用はな

くしただろうが、それでも降格もされず同じ仕事についている。6人の護衛戦闘機への態度と全く異なる。南雲は、サイパンの守備隊長になったが、現地で自決した。源田は戦後も生き残り、自衛隊の航空幕僚長に就任し、参議院議員にもなっている。

陸軍でも同様である。辻政信は、ポート・モレスビーにいるマッカーサーを攻撃しようとして「思いつく」。実際に攻撃機に乗って攻めて行くと、当然反撃を喰らう。すると慌てて引き返すように指示する。つまり怖気づいてすぐ逃げる。兵士には、日常茶飯事である。単に手柄が欲しかっただけで、兵の命など、なんとも思っていないことがわかる。ノモンハンでも思いつき。戦後も大衆受けするようなことばかり言っていたが、実際には蒋介石に匿われていただけ。インパールの牟田口廉也も同じで、2年前には兵站の問題で不可能と拒絶したくせに、自分の手柄になると思うと攻撃させる。道などあつてないような場所だから、突っ込め！だけ大声で命令する。そして3人の師団長が成功しても、武器弾薬や食糧の補給もしない。挙句は、命令違反で更迭する。「ワシら、牟田口やなしに無茶口やいうてたの」。揚句は白骨街道と呼ばれる。こいつだけは、暈の上で死なせるな！

最近のみならず何回か経験したのだが、海外に出かけて、出張でも旅行でもかまわないが、発熱やお腹をこわして、税関や検疫で申告せず、平気で日本国内に入ってしまう。もし、エボラ出血熱やコレラだったり、あるいは MERS のような感染症の潜伏期間だったりしたらどうやって責任をとるのだろう。症状がなく、気が付かずにインフルエンザを持ち込んでしまった高校生とはわけが違う。(このとき、既にかいたが、学校に抗議の電話が鳴り続けたという。バカじゃなかろうか。そんなところにだけエネルギーが有り余っているのだ。) そういう社会人として最低限持っていなければならない常識をわきまえないのが増えた。そんなヤツ、平気で診療所に来てもらいたくない。むしろ保健所に行くべきで、隔離するべきである。「俺の行った所には伝染病がなかった」と言うが、エボラの患者がトランジットで立ち寄った可能性のある所である。そのくせ、権利だけ騒ぎ立てる。さらには、次元が違うが、自分の子どもを抵抗できないのをいいことに殺してしまう。ガキがガキ産む。他人の命を平気で奪う。誰でも良かったなどとほざく。キチガイが野放しだが、人権があるからだって。ひき逃げは日常茶飯事。鐘がからむと、家族でも何でも殺してしまえ！詐欺にしても、判断力の鈍い高齢者を身内にみせかけて、そのうち、銀行などをかたって欺く。・・・他人に対し思いやりのない事件ばかりで、日本人とは思えないような。かと思えば、することもなく、無目的に真夜中の繁華街の片隅でたむろしている若者たち。こいつらが、いざという時に役に立つだろうか。

高城氏は嘆く、私は「本を売っているのではない、考え方を売っているのだ」と声を大きくして言ってきましたが、いまはその言葉が天から弾き返されるような絶望感だけが、私を支配しています。・・・坂井氏が、「この国は、それでも大切にしなければ・・・」

あとがきに、高城氏が言う、寺山修司氏の歌を引用している。

「マッチ擦る つかの間 海に霧深し 身捨つる程の 祖国はありや」

自爆を強要された中攻のメンバーが、こう思ったかどうか。亡くなった 200 万、300 万人の戦士たちも今生きていればこう思っただろうか。

阪神淡路大震災のとき、それまで「金さえあればいいのやろ」ばかりと思っていたら、義捐金が驚くほど送られてきて、またボランティアも全国から駆けつけた。沖縄の基地反対をしている、全国から集まっている「騒ぎをおこそうとしている」連中とまったく異なる。あの地震のときは、「日本人もまだ大丈夫だ、捨てたものでもなかったですね」と先輩と語り合ったのだが、現在のような状況なら、現在のような日本なら、ボクは身を捨てるのはいやだ！